

祐徳稻荷神社寄託  
中川文庫本

「東撰和歌六帖」（解説と翻刻）

福 田 秀 一

要 旨 鎌倉中期に關東の好士後藤老岐守基政が撰んだ「東撰和歌六帖」といふ私撰類題和歌集があり、実朝や北条氏一

門をはじめ關東武士の詠も多く見えるため、早くから一部では注目されてゐる。

しかるに従来知られてゐた「東撰和歌六帖」の諸本は、続類従本以下すべて、題目録は六帖分を有しながら、本文は第一帖（春部）のみであつた。ところが表記の中川文庫本は、抄出本ながら第四帖（冬部）の途中までを有し、例へば新出の実朝の歌を含むなど注目されるので、ここに祐徳稻荷神社および所蔵者鍋島家の許可を得て同本の本文を翻刻し、索引および略解題を付した。

続群書類従（卷三六九）に「東撰和歌六帖」と題する私撰類題和歌集が収められ、実朝や北条氏一門をはじめ関東武士達の歌が多数見えてゐるために、実朝や関東・鎌倉の歌人・歌壇に関心を持つ人々の間では、早くから注目されてゐる。例へば、古くは久曾神昇氏「鎌倉時代の私撰集」〔『書誌学』昭一三・四〕や、斎藤茂吉の『源実朝』に引かれてゐる中垣五郎氏「源実朝の和歌」〔『国語』昭一四・二〕・弥富破摩雄氏「実朝の歌と東撰六帖」〔『アララギ』昭一四・四〕、近くは浜口博章氏「鎌倉歌壇の歴史と業績」〔『甲南大学文学会論集』第一号、昭二九・一〕の如くである。そしてその撰者や成立事情についても、「吾妻鏡」〔弘長元年七月廿二日の条〕や笠間時朝（本集にも入る）の「田舎打聞集」によつて、宗尊親王の命を受けて後藤老岐守基政（これも本集に入る）が撰進したものであることが、斎藤茂吉（前掲書）指摘のやうに『校註国歌大系』（第九卷「撰集歌合」）の解題（「古今和歌六帖」の項、山岸徳平氏、『山岸徳平著作集Ⅱ 和歌文学研究』所収）や久曾神氏の論攷（前掲）以来よく知られてをり、成立年代も、「吾妻鏡」の記事（前述）と本集とを結びつけることに若干の問題がなくてはならない（浜口氏前掲論攷参照）が、一応それと関連させて弘長元年七月以後間もなくであらうと考へられてゐる。

ところで、この「東撰和歌六帖」（略称「東撰六帖」）は、続類従本をはじめ、彰考館本・島原松平文庫本など、従来知られてゐる各本とも、巻頭に「東撰和歌六帖題目録」と題して四季恋雑の六帖分を列挙してゐる（序に言へば、従つて本集の六帖の構成や題の立て方は、「古今六帖」の系統を引く「現存六帖」などと様相を異にするが、そのことは既に山岸氏の前記解題に指摘済である）が、本文は第一帖春部しかない。即ち残欠もしくは零本であるが、このことも既に『大日本歌書総覧』以下に指摘され、周知のことである。しかも第一帖で撰定が打切られたのではなく第六帖雑部まで完成したものであることは、前述の「田舎打聞集」によつて明白で、そのことも久曾神氏（前記論攷）言及済である。

以上のやうに、「東撰和歌六帖」は長く第一帖しか伝本が知られず、『国書総目録』に「現存本は春部一冊のみ」と記す通りであつた(但し、同書は以下に紹介する祐徳本をも挙げてゐるので、その点では正確でない)。ところが、先年(昭和三十七年)今井源衛・橋本不美男その他の諸氏と共に祐徳稻荷神社寄託中川文庫本の調査に當つた折、図らずも同文庫の藏書の中に「東撰六帖」の第二帖以下をも有する伝本を発見した。実朝の作として新たに知られるものなどもあるやうで、中世和歌史や私撰和歌集に関心を持つてゐた(その関心は、今も捨てたわけではない)筆者としては大きな喜びで、早速にも学界に報告しようかと思つたが、この本も後述のやうに決して完本ではなく抄出本であり、かつ破損・汚損も多く、殊に末尾を祖本の破損で失つたものらしく見えるので、どこかに更によい伝本がありはしないかと、かつは探し、かつは待つてみたが、その後十余年を経てもその氣配が見えない。その間、この本のことを伝へ聞いて筆者に質問を寄せられる方々も現れ、かつて許されて複写(撮影)もした筆者としては、本文を早く公開する責務をも感ずるに至つた。その上、最近再び祐徳稻荷神社に詣でてこの本に再会したところ、心なしか破損が進んだやうにも思はれるので、この際所藏者鍋島家及び保管者祐徳稻荷神社の御許可を得て、こゝに本文を翻刻する次第である。

翻刻に先立つて同本の要点を言へば、現在の収納(請求)番号は第一二九函。二九・四×二〇・八種の楮紙袋綴一冊本。元来本文と共紙の表紙を有した(但し、後表紙は元来欠いたものと認められる)仮綴本であつたが、現在は比較的近年にその上に付した白ボール紙の表紙を前後に有し、元来の表紙は一見扉のやうな体裁になつてゐる。因みに、かうした装幀の本は、中川文庫本には多い。

便宜上、現在の形態で表紙・扉等の語を用ゐると、表紙左端に大きく「東撰和歌六帖」と打付外題(無論、本文とは別で後人の筆)、次に扉(元表紙)左上端に「東撰和歌六帖」と墨書(旧外題、本文と同筆)、次に一丁の遊紙を置いて本文が

始まり、巻頭には「東撰和調六帖第一撰哥」とある（以下、翻刻本文参照）。一面一〇行、一首一行書で、作者名（官職等を冠せず、多くは名のみの略記）は各歌の下にやゝ小書。題は歌頭より約五字下げ。本文三二丁、江戸初期（寛文元禄頃）の書写で、まゝ見える傍注も本文と同筆。奥書・識語の類はなく、本文冒頭に「中川／文庫」「直卿／之印」の二印がある。前述のやうに多少の破損・汚損があり、殊に末尾（鼠害と見られる）に近づくに従つて其しい。

さてこの本（中川文庫本）は、前述のやうに從來知られなかつた第二帖以下の内容を含む貴重な伝本であるが、残念ながら二つの点で完本でない。二つの点とは、抄出本であるといふことと、第四帖の途中以下を欠くといふことである。

第一の点は、第一帖を他の現存本（例へば続類従本）と比べてみれば明白で、続類従本三〇題（目録によつて数へる。本文には脱字がある）三一九首の中で、この本が有してゐるのは一七題七四首に過ぎない。この中、一三題（春雨／歎冬）を一続きに欠く点については、秋部（第三帖）で刈萱・浅茅・蘭の三題を一続きに欠くことと共に、あるいは親本がその部分を欠いてゐたのではないかとも思はれる（それ以外の題は落してゐない）が、採つた一七題の中を見ても、続類従本の歌をすべて有してゐるのは冒頭の立春（五首）と躑躅（四首）とだけで、他の一五題については、多少とも抄出した形になつてゐる（一箇所、「鶯」に歌順の相違がある）。第一帖の冒頭に「東撰和調六帖第一撰哥」とあるのも、この意味であらう（但し、第二帖以下には「撰哥」の二字はない）。又、この抄出がいかなる意図や方針で行はれたものかも、今後の検討に俟たねばならないが、一見したところ、「三品親王」（宗尊親王か）の詠だけは漏らさず採つてゐるやうである。但し、それが抄出者や抄出方針に結びつくかどうかとも、今のところ不明である。

第二の、末尾を欠くといふ点も、翻刻本文と続類従本等の「題目録」とを対比すれば明らかで、中川文庫本は「神楽」の題のみを書いたところで余白を残して終つてゐるが、これがこの本の書写者に起因するものか、親本の形をそのままへるのか、後者の場合にはその中絶がいつ生じたものか、即ち親本の書写以後に末尾の離脱が起つたのかそれと

も親本が既に現在の中川文庫本のやうな書写形態になつてゐたものか、などは、一切不明と言ふ他ない。

本書の翻刻に當つては、從來知られてゐる本と対校するか、何らかの形で並べ掲げて対比もしくは合成した本文を作るかした方が便利な点もあるが、前述のやうに阿系統本に共通するのが第一帖だけである上、作者名表記の相違(必ずしも作者の相違ではない)や歌順の異同もあり、一挙に対比・合成本文を示すことは却つて煩はしくもあるので、今回は先づ中川文庫本の本文をできるだけ忠実に翻刻することに狙ひを置いた。

翻刻に當つて取つた具体的な方針は、一般の慣習と違はないつもりであるが、要点を順不同に簡条書で示せば左の如くである。

一、漢字・仮名の別や仮名遣等は底本のまゝとしたが、変体仮名は通常の平仮名に改めた。又、漢字(底本は行・草書)の字体はなるべく底本のまゝとしたが、円・雁・声など若干当用字体に改めたものがある。

二、改行は底本の通りとし、文字(傍注を含む)の位置も、できるだけ底本の通りとした。

三、破損・汚損によつて判読しがたい部分は、推定字数又は範囲(作者名の場合)を空白(□・□等)で示し、辛うじて判読し得た文字はその中に記し、前後の意味から推測した文字は括弧に入れて傍注した。その他一般に、括弧内は翻刻者の注記である。

四、誤脱の疑等、本文に関する注記・私按は、該当箇所\*を付した上、下欄に掲出した。

五、底本各丁の表の終には「を、裏面の終には」を付し、その丁数と表(オ)・裏(ウ)の別を略記した。

なほ、底本は現在第二九・三〇丁のところに書写後の綴ち違ひ(乱丁)があると認められるので、今回はそれを訂した順序で翻刻した上、底本の丁数をそのまゝ記しておいた。

六、索引検索の便その他を考へて、歌頭に一連番号を付した（統類従本等と関係づけなかつた理由は上述した）。

（付記）

本書の翻刻に当り、それを快く許可された鍋島家ならびにその点について御幹旋下さつた祐徳稻荷神社の宮司及び社務所の方々、又初めにも述べたやうにかつて初めて本書を調査した折の共同研究のメンバー各位、そして先年翻字原稿の作成に御協力下さつた佐藤恒雄氏に、特に深い感謝を捧げる次第である。

東撰和譜六帖第一撰哥

春部

立春

一 冬こもり春立くらしみ雪降よしのゝ嶽に霞たなひく

二 雪の内に春知物は鶯の声とやいはん霞とやいはん

三 鶯のふるすにいかて告やらんまた冬なから春は立ぬと

四 雪の内にふるすたち出飛鳥のあすかの宮に春はきにけり

五 いつしかと霞もあへす山のはの朝日よりこそ春はきにけれ

早春

六 東より関越てくる春とてや相坂山の先霞らん

鎌倉右大臣

三品親王

平 泰時

\* 藤原

藤原—統類従本ニヨレバ藤原基綱

蓮生法師

三品親王「一オ

七 いとはやく霞そゝむる鏡山きのふの空もおもかはりして  
八 晴やらぬ雪けの山の横雲やかすめる空の始なるらん  
九 朝旦遠き山への梢より霞はしめて春はきにけり  
一〇 氷ぬし谷の小河の忘水岩まをとめて春はきにけり

霞

二 海山のかすむけしきのしるき哉風閑なる御世の春とは  
三 芦垣のまちかき山の朝霞春はきぬとやたちへたつらん  
三 立こむる春の霞の一重山うすくそ松の色もみえける  
四 いつもたつあまの<sup>あまの殿</sup>と山の夕煙ふかきや春の霞なるらん  
五 もしほやく浦のしるへもなかりけり霞に余る煙ならねは

鶯

六 かきくらし猶ふる雪の寒ければ春ともしらぬ谷の鶯  
七 雪消ぬ谷にも春はよそならてまつ鶯の初音をそ聞  
八 高円の宮の鶯いにしへにかはらぬ音をやいまもなくらん  
九 雪残る千枝の雫や寒からししのたの杜の鶯の声  
一〇 尋きて軒はの梅に鶯の花ちる迄と宿やかるらん  
一一 梅花笠にぬふてふ青柳のいとかの山に鶯そなく  
一二 朝日さす軒はのたるひ露落て咲あへぬ花に鶯そなく

平 重時

平 政村

権律師  
公 朝

浄意法師

二条三位  
教定

三品親王

藤原雅有

三品親王

藤原重教「一ウ

鎌倉右大臣

素遲法師

真照法師

権少僧都  
孝源

平 重時

藤原基政

藤原基滋

子日

三 梓弓はるたつ野への小松原千世のためしに今やひかまし

三品親王「ニオ

四 子日して君をそいはふ久堅の光のとけき春のひくらし

平 長時

五 たつはるの子日の小松引つれて大宮人は今帰るらし

三善康茂

若菜

六 たてそめしくるすのわかな世々ふりて年をつむへき物と知きや

浄意法師  
るーに(爾)ノ誤ガカ

七 わかなつむいさ人まねに春日のゝ雪の下道ふみならしてん

鎌倉右大臣

八 春雨のふるのゝわかな君かためしるてやつまん袖はぬるとも

高階家仲

余寒

九 春きても吹やあらしの猶さえて小川の水に朝氷せり

三善康茂

一〇 たちそむる春の霞のうす衣また山風は袖にさえつゝ

順真法師

残雪

一一 あら玉の年や外より越つらんまた雪消ぬ相坂の関

良心法師

一二 足引の山の春風猶さえて霞の下にのこる白雪

藤原時家

一三 かすめともまた下とけぬ水茎の岡の屋形にこはる白雪

二条三位  
教定

一四 初草は下にもゆれと片岡のをとるかうへの雪はけなくに

平 重時

一五 時しらぬ山風寒て春も猶富士のすそのに残る白雪

三品親王

一六 もえ出てまたうらわかきはつ草の浅のゝはらの雪の村消

順真法師



三 鶯ははやなましを外面なる竹のは山に雪は降つゝ

梅

三 けふ行ていさ折とらんとふ鳥やあすかの里の梅の初花

元 里はあれぬ春はむかしの春なれやかはらす匂ふ春の梅かえ

四 春といへは先咲花のかひもなし雪の色なる野への梅かえ

四 故郷にたれしのへとか梅花むかし忘れぬ香に匂ふらん

四 ことし咲わか木の梅の初花にならはぬ人のまたれ初ぬる

四 こぬ人をうらむる迄はなかりけり盛またしき宿の梅かえ

春月

四 足引の山のあなたも春なれはかすみていつるよはの月影

四 熊野路やしのたのもりの木間より千重にかすめる月をみる哉

四 雲はみな天つ嵐にさそはれてはるゝもかすむ春のよの月

四 かすめ只春ならぬよの月とても心のはれて見る時はなし

四 かすめともいかてしらまし難波瀉入江の月の影なかりせば

四 春の夜の明方ちかき雲まより山のはみえて残る月影

五 春やあらぬ月は見しよの空なからなれし昔の影そこひしき

五 うき事はずとの身にして月みれば春や昔の思ひ出そなき

五 明ゆかは匂ひや袖に残るへき花の陰もる春のよの月

権律師公朝

鎌倉右大臣

三品親王三オ

寂身法師

鎌倉右大臣

順真法師

円勇法師

寂身法師

藤原基滋

平 俊職

良心

三品親王三ウ

鎌倉右大臣

公 朝

親 行

五 桜花ちりかひかすむ春の夜のおほろ月よのかもの河風

春曙

五 幾里も同じ詠やかすむらん山のは遠き春の曙

五 吉野山花は夜のまにちりにけり木下白き春の曙

五 たか方に夜と契りて帰らんだのむの雁の春の明ほの

帰雁

五 雁かねのかへるもをのか心にて鳴そあやしき明ほのゝ空

蛙

五 春ふかみ花ちりかゝる山の井のふるき清水に蛙鳴也

五 山吹の花のちるをやおしむらん井出のかはつの声／＼に鳴

躑躅

五 岩つゝし咲にけらしな紅葉せぬときはの山も色かはる迄

五 舟よせてかさしにおらんみつゝしの磯山下風今さかり也

五 つゝし咲山下日影暮やられて岩ねの水に色そ移ふ

五 詠やる空に煙はたなひかて野へをやく火やつゝし咲らん

藤

五 紫の藤さく山の松のはに入日もかゝる春の夕暮

五 咲にけり誰に見せましょく山のいはかき沼の岸の藤浪

鎌倉右大臣

三品親王

權律師  
仙覺

行念法師

一四〇

平重時

鎌倉右大臣

平重時

藤原基治

入道大納言家  
左衛門督

下風一風ノ誤写カ

房円法師

源光行

一四〇

三品親王

信生法師

空 こきかへり見てこそゆかめひめしまの小松かうれにかゝる藤なみ  
暮 かゝる弥生のすゑの藤の花うつろふ色に春をすくなき

素還法師  
千相丸

暮春

空 嵐吹やよひの末の花のかものこりすくなき有明の月  
充 花さそふ宇治の河浪岩こえて行衛しらすもくるゝ春哉  
空 おしむへき木末の花は跡もなし春の日かすは猶のこるとも  
三 花もちり春もくれ行山のはに霞はかりそたちのこりける

弥生尽

「五才

三 いかにせん霞の袖の花のかもけふ斗なる春の名残を  
三 心から古巢たつぬる鶯も帰わかれの音をや鳴らん  
三 年ごとに同じ別をなけくかな暮ては春のけふに成つゝ

藤原基輔  
順真  
藤原重教

〔七行分空白〕

「五ウ

東撰和調六帖第二

夏

更衣

三 山吹の花いろ衣ぬきかへて夏しりそむる井手の里人  
三 行春を一夜へたてゝさゝ竹の大宮人は衣かふらし  
三 大方のならひにかへてくやしきはなれし桜の花染の袖

源光行  
証定法師  
守季

花染の袖のわかれのかなしさにたつひはきかしせみのは衣  
ちる花になれしかたみをひきかへてけふ立そむるせみのは衣

藤原基隆

泰時

神祭

あきつすやくにつことわさいかなれは卯月に神を祭初けん  
榊さす卯月きぬれははふり子も柏手まつる杜の下陰  
けふとてもおりなつくしそ柏木のはもりの神はかみならぬかは  
道のへの里の木末にしめかけてけふ神まつる遠の山もと  
ゆふかくるみむろのさか木折はへて卯月になれば神祭也  
神まつる卯月になれば玉川の岸に白ゆふ花咲にけり

卯花

太山路の夏のゝ草を分ゆけはむら／＼白き里の卯花  
山里の賤か袖垣うすければひとつにさける庭のうのはな  
山かつのしつはたぬのをおりはへて夏の日さらす庭の卯花  
夏なれは空は雪けもなき物を垣ねあやしくさける卯花  
雪の内にとほらぬ浪や白妙の卯花山の谷の下水  
誰里に月を待らん卯花の咲山もとはゆふやみもなし  
短夜の詠にあかて入月のわすれかたみの庭の卯花  
夕月夜ほのかに見えて小倉山木下陰にさける卯花

藤原基滋

能清

政村

重時  
一六ウ

親行

光西

長時

平時直

葵

四 あふひ草かつらにかけて千早振賀茂の祭をねるやたか子そ  
五 そのかみに心そかけしあふひ草けふのみあれにかさしつるかな  
六 君にのみ思ひをかくるあふひ草ふたはにわくる心たになし

郭公

七 我宿に今かきなかん時鳥松にかゝれる池の藤なみ  
八 いづくにも初音や遅き時鳥なきぬとかたる人たにもなし  
九 時鳥はのめくさよの一声はきえても猶そ人にとはるゝ  
一〇 まちかねし心ならひに時鳥猶一こゑはきゝも定す  
一一 うつゝとも思ひそわかぬ子規夢の枕のよその一こゑ  
一二 かすかなる只一声は時鳥きかぬになして猶そまたるゝ  
一三 あまの戸の明行空の村雲に一声なのるほとゝきす哉  
一四 ね覚して今そきゝつる時鳥人つてならぬよはの一声  
一五 またれつる心よはさも時鳥初声きけは忘れにけり  
一六 詠やるむかひの里の郭公卯花月夜ほのかにそ鳴  
一七 神なひのいはせの杜の村雨にはつ音をもらす杜宇かな  
一八 遠方の山かくれ行蜀魄こたふる声そこゝに鳴なる  
一九 山彦の声もかはらず時鳥いつれのかたをわきて詠ん

鎌倉右大臣

藤原時朝

花山院宰相  
中将長雅

三品親王」七〇

慈信法師

源 光行

政 村

雅 有

権大僧都  
最信

真 照

良 心

藤原基隆

三品親王」七ウ

泰 時

藤原清定

二〇 さらぬたに行末いそく太山路に鳴て過ぬる時鳥哉

二二 逢坂や鳥のねをそき関の戸を鳴て越行郭公哉

二三 時鳥月にかた待山のはをいつれかたきに出んとすらん

二四 村雨のはれまに月は出にけりうたてつれなき郭公哉

二五 宵のまはつれなかりつる蜀魄有明の月に絶す鳴也

二六 郭公よとのわたりにさ月こは河瀬の浪にをちかへりなけ

二七 五月にはなきもふりなんと思ひしに猶めつらしき時鳥哉

二八 さ月ともいはてのもりの時鳥ねに鳴比をいかて知らん

二九 むさしのゝ野中のもりの時鳥山のは遠きねをや鳴らん

三〇 紫のねはふよこのゝ子規ゆかりたつねて音をや鳴らん

三一 かそへ見はたゝゐのもりの郭公幾夜に成ぬよかれせずして

三二 をちかへりむかしからへ橋の花ちるさとの山杜宇

三三 蜀魄声きく時にあはんとや花たちはなも五月待らん

### 盧橋

三四 郭公こてふににたる匂ひ哉またすしもあらぬ宿の橋

三五 時鳥なくやさ月の雨はれて風こそわたれ軒のたちはな

三六 とへかしな村雨そゝく夕風に橋にはふ宿のけしきを

三六 うたゝねのよるの枕にかほる也物歎おもふ宿の軒の橋

真 昭

円 勇

蓮生法師

三善康茂

三品親王家  
三 川

房 円

源 基氏

藤原基広「ハオ

入道大納言  
家 弁

鎌倉右大臣

光西法師

家 仲

藤原景家

三品親王

素遲法師

鎌倉右大臣「ハウ

二七 袖のかは花たちはなに残とも誰かは我を思出へき

法眼定

二八 しのはれん我身の程をおもはねは袖にもなれす庭の橘

藤原時朝

二九 むかし思ふ花たちはなの袖のかはふる郷人の形見也けり

平 長時

三〇 誰うへて昔を今にのこすらん里はあれにし庭の橘

藤原信教

早苗

三一 山城のよとのゝ菖蒲生にけり鳥羽田の早苗今や取らん

源 光行

三二 しめはふる山田の早苗ひきわけて心くゝに急比かな

藤原基綱

三三 時しあればにまの里人数々にをのか五月と早苗取也

淨 意

三四 程遠き山田のさなへ取民の足もやすめぬ里の通路

顯 氏

三五 乙女子かつけのをくしはさし置つ取や早苗のいとまなき比

真 昭  
「九オ

三六 五月雨はふれとふらねと早苗取田子のもすそのぬれぬ日はなし

順 真

三七 さみたれは猶山科の里人のぬれても早苗とらぬ日はなし

重 時

三八 空にこふ雨まちえたる小山田は五月の後もさなへ取也

政 村

菖蒲

三九 沼のへのまこもましりのあやめ草わきてしかれは日そくれぬへき

重 時

四〇 むは玉のよとのゝあやめかり初にむすふ斗の草枕かな

源 満氏

四一 こよひわかあやめの枕むすはひとりかたしく袖は匂はし

藤原長直

四二 五月雨の比はよとのゝあやめ草ひく手もふかく水まさりつゝ

長 時

一四 さみたれには末もみえず成にけり入江のあやめみこもりにして

三品親王

一四 あやめ草同じよとのゝふかき江にしつむ末はや引残らん

親行 九ウ

一四 あやめふくさ月のけふや故郷の軒の忍ふも露はらふらん

### 五月雨

一四 渡りする淀の川せのいかならん水かさそまさる五月雨の比

泰時

一四 舟かよふたかせのよとの綱手縄打はへてふるさみたれの比

円勇

一四 五月雨の空に煙は見えわかつて音のみ高きふしのなるさは

公朝

一四 日数ふるむろのい嶋のさみたれに思ひありとも見えぬ比かな

いー八ノ誤写カ

一五 さらにぬたにはすまもらぬ海士人の袖師の浦の五月雨の比

清原持幸

一五 あまの住里のしるへの煙たに浦ちにたゆるさみたれの比

円勇

一五 いたつらに月のさかりは過にけり幾夜もつゝけ五月雨の空

家仲

一五 なかき日も夕暮またぬ山陰に猶空とつる五月雨の比

親行 一〇オ

### 照射

一五 時は今さ月になれやともしするしつはた山にたゝぬ日もなし

基政

一五 ともしゝて入さの山の下露にあげぬと帰る袖やぬるらん

親行

一五 ともしする太山かくれに立鹿は螢を見ても物やかなしき

浄意法師女

### 河

一五 うかひ舟暁やみをまちえても程なくしらむかゝり火の影

円勇



一五 くだたりせに今成ぬらしうかひ舟なかれてはやきかゝり火の影  
一六 うかひふね竿さす浪のはやきせにのほれはくたるかゝり火の影

蚊遣火

一七 かやり火の煙も今は心せん月見ぬ里の名にもこそたて  
一八 かやり火の煙の末や曇らん暮もやすき山のへの里  
一九 明行はもゆる螢のかけもなし煙そのこる宵のかやり火

夏草

二〇 花ちりし跡とも見えす桜あさのおふの下草いつしけりけん  
二一 月にたにしられぬ夢や結ふらんしけみか下のひめゆりの花  
二二 夏ふかみしける草はのたえまより野沢の水のほとはしらるゝ  
二三 我宿の庭たにふかき夏草にいかにのほらの道絶ぬらん  
二四 故郷の庭の夏草ふみ分てかよはぬ比や猶しけるらん

瞿麦

二五 故郷と成にしをのゝ朝露にぬれつゝ匂ふ大和なてしこ  
二六 あればてゝ色も見えぬ故郷に残りてさける撫子の花  
二七 さかぬまは草にやつれし我宿の庭もてはやす常夏の花  
二八 名もつらしくるれば露のやとりにて君かよかれしとこなつの花  
二九 見ても猶しく物そなき敷嶋ややまとはあらぬとこなつの花

慈信  
親行

基隆  
「一〇ウ」

親行  
光行

藤原時朝

真昭

寂身

基広

鎌倉右大臣「一一オ」

真昭

長直

入道大納言  
家左衛門佐

同家  
兵衛督

夏月

二三 夏山の嶺の梢やしけるらんいつるも遅きよはの月かな

教定

二四 急雨の過ぬる跡の夕露に涼しくやとる夏のよの月

藤原時家

二五 よもすからしほるゝあまの夏衣月にははさぬならひ也けり

教定

二六 あまの住里の煙も心あらはみしかきよはの月なへたてそ

藤原時朝

二七 明ぬれは猶入やらてみしかよの名残をのこす山のはの月

平時仲「二一ウ

二八 てれは置くもれはをかぬ夏のよの月にしたかふよはの霜哉

泰時

白雨

二九 夕立やしつか笥に水越てまた見ぬ滝のけふそ落くる

重時

三〇 空は猶まきのお山の嶺つゝき夕立すらしうちの川浪

親行

三一 白雨の涼しくはるゝ山風に日影もよはきもりの下露

螢

三二 夏ふかく茂る野沢の草村に影も乱てとふ螢哉

証定

三三 浅ちふの尾上の宮は荒にしを今も玉敷夏虫の影

真昭

三四 穂に出ぬ尾花かもとの草の名を光にみする夏虫の影

三五 伊勢嶋や汐ひのかたの夕闇に猶玉見えて飛螢哉

実泰「二二オ

三六 もしはやくいちの笛やに飛螢をのか煙のたつかとそみる

光行

三七 夜舟こく入江の浪に影みえて芦間もしるく飛螢哉

政村

一八 同し江に芦分を舟こかれてもさはらて行は蟹也けり

家仲

一九 同し江に下やすからぬ水鳥の思ひをみせて飛蟹哉

素暹

二〇 夕されは秋風かよふ夏草の下葉乱てとふ蟹かな

善念法師

二一 風ふけは蟹みたるゝ芦垣のま近き程に秋やきぬらん

藤原忠繼

氷室

二二 むかしより日影もさゝぬ谷の戸を解ぬ氷室と定置てき

頭氏

二三 涼しさのたゝちも見えぬ氷室哉木下深き山陰にして

長時

二四 今日とてやむろの扉を明初て大山守かみひそなふらん

芳季  
「二ウ」

納涼

二五 賤の女か手引の糸の永日に結びもあかぬ山の井の水

澄\* 定  
澄—フルイハ証ノ誤字カ

二六 衣手にかよふも涼し蓮はのうら吹かへすきしの松風

芳季

二七 夕立の雨の名残の露落て山路涼しきひくらしの声

藤原

二八 風の音も秋にさきたつ山もとの木陰涼しき蛸の声

信生

二九 日くらしの鳴音も涼し夏山のこの下かくれ秋やきぬらん

澄\* 定  
澄—同右

夏被

三〇 被する夜の更行はぬさにとるあさのはしめり袖そ露けき

法印定清

三一 みそきするけふとはしりぬ湊川ゆふしてかけてかへる浦浪

仙權律師

三二 みそきするうきてなかるゝゆふしてのよるをや夏のとまりなるらん

仙權律師  
「二三オ」

三 秋も今はあすかの川に御被してかへれば夏のよそ更にける

〔九行分空白〕

三品親王家祐  
右衛門督

一三ウ

東撰和調六帖第三

秋

立秋

二四 いつしかとね覚の床の露けさはさよの衣に秋やたつらん

藤原基治

二五 夏は只うつせみのよの夢なれやさむる枕に秋風そ吹

鎌倉右大臣

二六 行末も思ひしられてさひしきは今朝吹初る秋の初風

定承

初秋

二七 あはれ又いかに詠めん月のうちのかつらの里に秋はきにけり

鎌倉右大臣

二八 かはり行月日とはかり思ふたにかなしき物を秋はきにけり

公朝

二九 いづくにか過ぬる夏の宿ならん秋のいたらぬ里はあらしを

隆弁  
「一四オ

三〇 ふきかへす岡の葛ははうら見えてまたひとへなる袖の秋風

家仲

七夕 付後朝

三一 天河岩こす浪やたかゝらし空にそわたすかさゝきの橋

千手丸

三二 七夕のあまのは衣いかなれはかさぬるなかのまとなるらん

円勇

三三 たなはたのあひ見るよはのむつことにこそその名残や先かたるらん

和空

三四 七夕は今日行合の半天にたちなへたてそ天の川霧

長時

三五 ふけゆかは月も入なん天川はやこきわたせつまむかへ舟  
三六 幾秋のつらさにたへて七夕の今朝の別を又歎らん

萩

三七 音に聞萩の上葉の風よりやめにみぬ秋をしりはしめけん  
三八 さらぬたに物思ふ比の秋風を音になたてそ庭の萩原  
三九 あれにたる故郷からと思ひしに野はらの萩も音そ身にしむ

萩

三〇 さもこそは色ふかゝらめ紫のねはふよこのゝ秋萩の花  
三一 我宿の庭の秋萩咲にけり朝置露の色かはるまで  
三二 白露の色さへけさは移ひて花の数そふ野への萩原  
三三 秋萩のふる枝の花も咲にけりもと立なれし鹿や鳴らん  
三四 うつし植し庭の小萩そ咲にけるもとの野原に鹿や鳴らん

女郎花

三五 をみなへし露のぬれ衣ほさてきん花にたつ名はさもあらはあれ  
三六 女郎花(以下欠)

薄

三七 此比はしのに乱て吹風に猶露たえぬ玉のを薄

鴨頭草

素遅  
能清

三品  
『一四ウ

藤原基輔

素遅

三品

教定

時家

円勇

寂意

基綱  
『一五オ

入道大納言家  
左衛門佐

三六 白露もかことなかけそ月草の移ひやすき花のすかたに  
三九 あたに見るたくひなれとや朝貞の色に咲らん月草の花

定 撰  
基 政

槿

三〇 起て見る程たにまたぬ朝貞の花に宿かる露そはかなき  
三一 花は猶しほれなからものこりけり日影に落る槿の露  
三二 かれぬとは日ことにみれと朝貞の花の盛そ久しかりける  
三三 さき初し昔の秋をかそへきて思へは久し薜の花

藤原時朝  
芳 季  
真 昭  
浄 意  
「一五ウ

秋夕

三四 花薄草の袂に風過てこぬ人招く秋の夕暮  
三五 いか斗四方の草木のしほらんあらし風立秋のゆふくれ  
三六 なにとなくすゝろに物のかなしきはひとり詠る秋の夕暮  
三七 忘れすはうらむる人も恨らんとはねはとはぬ秋の夕を  
三八 独聞みねの嵐を思ひやれ猶山ふかき秋の夕暮

長 時  
眞 昭  
時 朝  
基 綱  
浄 意

露

三九 蜘蛛の玉ぬくいとの緒をよはみ風に乱て露そこほるゝ  
四〇 見渡せは千種の花の色々にむすひかへたる野への白露  
四一 秋はまた浅沢小野の小萩原下はの露の色そ見え行  
四二 村雨の晴行小野のこ萩原ゆふくれまたて露や置らん

鎌倉右大臣  
観鑑法師「一六オ」  
藤 茂景  
政 村

虫

- 二三 きり／＼す鳴を我身のたくひにてしらぬ思を哀とそ聞  
二四 夕日さす岡の芝生の菰みをもかくさぬ音をのみそ鳴  
二五 きり／＼す誰かまさると秋のよのなかき思ひに鳴あかすかな  
二六 手枕の露の雫をぎり／＼すをのか鳴音の涙とやしる  
二七 ふかきよのかへに恨る蜚いつ迄草の露や寒けき  
二八 手枕によりはなはてそ蜚泪の露は霜もむすはす  
二九 風寒みたのむ陰野の村薄うら枯ぬとや虫の鳴らん  
三〇 霜寒き野への栖のきり／＼す身はならはしもたへす鳴也  
三一 霜ふかき庭の浅茅のきり／＼すよはる声にも夢は聞けり

鹿

- 三三 さをしかのをのか住野の女郎花花にあかすも音をや鳴らん  
三四 鹿のねはこなたかなたに聞ゆ也野中の廬の秋の夕くれ  
三五 夕されは草はの露を吹風に泪先たつさをしかの声  
三六 さをしかのたちの野原の夕霧に行方見えぬ妻やこふらん  
三七 秋をへてすかのあら野に立鹿のなかき音にのみ妻をこふらん  
三八 雲はらふ太山嵐にきこゆ也月すむよはのさをしかの声  
三九 足引の山の秋風身にしみてね覚は鹿の声そかなしき

公朝

寂意

円勇

園綱

光行

親行

神行郊「一六ウ

家仲

芳家

鎌倉右大臣

成忍法師

権律師  
謙忠

時朝

浄意

忠時

信生法師「一七オ

三九 ね覺とも又泪ともなる物はあかつき方のさをしかの聲  
四〇 をしかふす峯のくすはら恨てもなきても妻をこひぬよそなき

雁

六一 秋ことに風を便のしるへにて雲路まとはす雁はきにけり  
六二 みそら行風を便の浮雲にをくれて過る初雁の聲  
六三 明わたるかたのゝ沖の波まより見えて近つく初雁の聲  
六四 遠近の山のはつゝく雲間より今朝こえ初るはつ雁の聲  
六五 明ぬとて横雲いそく山のはに頭れやらぬ初雁のこゑ  
六六 久かたのあまぎる霧の絶まよりほのかにみゆる秋のかりかね  
六七 九重の雲井を分て久かたの月の都に雁そ鳴なる  
六八 あまのはらふりさけみれはますかゝみ清き月夜に雁鳴渡  
六九 くる雁は伏見の小田に声す也半天なりし契なれとも  
七〇 露霜のをくでの山田吹風の寒きよな／＼雁鳴渡

月

七一 山のはのくるゝ程なく出にけりゆふへすくなき秋のよの月  
七二 月すめは嶺の浮雲吹こして山より遠に風さはくらし  
七三 をは捨て月すむよはの村雲をはらひなれたる秋の山風  
七四 置露をはらはぬ迄は萩のはに風こそやとせ秋のよの月

家仲  
西円

長時

政村

実泰

圃行

親行

三品

鎌倉右大臣「一七ウ

同

重時

証定法師

行念

重時

珍誉

藤行茂



三三 をきまよふ露の下萩乱ても末はあまたに宿る月影

三二 萩原や山かけくらき庭の面に宿り分たるよはの月影

三七 うちなひく尾花か末に露落て月影もろきのへの秋風

三六 露むすふまさきのかつら長夜に玉ぬきかけてやとる月影

三九 久かたのあまてる月の秋ことにくもらぬかけはこよひ也けり

三〇 何となく秋は心のすむまゝにたゝよもすから月を見る哉

三一 何事を思ひのこして詠らんしつかなるよの秋の月影

三三 昔にもかはらぬ物はすかはらや伏見の里の秋のよの月

三三 秋のよのなからはまの真砂地に月影白くよする白波

三六 たまさかに見る物にもかいせの海の清き渚の秋のよの月

三五 大舟のかとりの沖にうきねしてゆたにそみつる秋のよの月

三六 秋のよのゆらのとなかに霧晴てわたる舟人月をみるらし

三七 詠やる磯へは霧のたちこめておきそあかしのうらの月影

三八 もしはやく煙ふきしき浦風に空はくまなき秋のよの月

三九 松浦河々浪遠く霧はれてなゝせのよとにすめる月影

三〇 あらし吹きひの中山霧はれて細谷川に月そやとれる

三二 おくもなき岩ほの扉をし明て住人みゆる秋のよの月

三三 人とはぬ軒は律のしけれゝは影猶うとき秋のよの月

親行

教定 一八〇

能海

親行

藤盛能

淨忍法印

印一師ノ誤字カ

西円

今徳丸

行円

鎌倉右大臣

公朝

「房四法師」一八九

重時

平経成

素暹

□\*命法師 □立心篇(リッシンベン)ノミ  
判読可能

真昭

高階宗仲

三三 村時雨そめて過行雲間より木葉にのこる嶺の月影

三品

三六 月をみる秋は時雨のなくもかなこのはの色は露も染なん

藤基氏

三五 すそのなる浅茅色付夕露にかけあらはるゝ山のはの月

能清

三六 霜むすふあさのさ衣うちたえて影寒きよの月をみる哉

基綱  
一八九オ

駒迎

三九 相坂の山へてらせる月影は関引駒の数を見よとか

三品

三六 逢坂の杉の下道引留て清水かふらし望月の駒

家仲

三九 相坂の関の清水のかけもなし八重立こむるきりはらの駒

行念

野分

三〇 風の音雲のけしきもかはり行のわきに成か秋の急雨

基隆

三二 年をへてねりそ朽行架垣も慕<sup>\*</sup>風の跡そかこち顔なる

慕—慕ノ誤カ

擣衣

三三 身に寒き風につけてや山賤のあさのさ衣打はしむらん

政村

三三 昨日けふうつつせみのから衣夜寒に成ぬ杜の下風

親行  
一九ウ

三四 呉竹のすゑは夜長き秋風に誰ふし侘て衣打らん

家仲

三五 須磨の浦や定ぬあまの宿迄も里ありかほに衣打也

政村

三六 月すめはもしほもやかぬ難波江の海士のすさひに衣打也

房円

三七 月影も身にしむ比の秋風を夜寒なりとや衣打らん

能清

三〇六 長夜の更行鐘は音絶て猶うちやまぬあさのさ衣  
 三〇九 衣打碇の音のなかりせは秋のね覚を何にかこたん

霧

三二〇 しら鳥のとはたの里も此比の霧の外なる黄昏そなき  
 三二一 行むかふ遠方人の音はしてそこともみえぬ嶺の朝霧  
 三二三 見馴てももとのふちせやたとるらん下す小舟のさほの川霧  
 三二三 赤石潟嶋のこなたの朝霧に先かくれ行海士の釣舟  
 三二四 明石潟こき行舟のほの／＼と見ゆるや霧の絶間なるらん

稻妻

三二五 ありはてぬ浮世中の程なさを空に顕すよひのいなつま  
 三二六 風わたる秋の田面の露落て雲まにきゆる宵の稻妻

秋田

三二七 雁のゐる門田の稻葉打戦きたそかれ時に秋風そ吹  
 三二八 足引の山田の稻のかたよりにつゐこきたれて秋風そ吹  
 三二九 白露を打こきたれて大夫か急く田面に秋風そ吹  
 三三〇 入日さす田面のはなみかたよりて一方に吹秋の夕風  
 三三一 尋きて落穂ひろはん方そなき田頭の霧の秋の夕暮  
 三三三 思ひやる袖も露けし小山田の廬守賤か秋のね覚は

時家  
基遍

藤行茂

順真

芳霧  
一二〇オ

真昭

三品

顕氏

素暹

鎌倉右大臣

行念  
あーゆノ誤カ

素暹

真昭  
一二〇ウ

親行

房円

鳴

三三 よそなから聞たにかなし物思ふたかあかつきの鳴の羽かき

三四 \*立回む  
ことはりや野沢の霧のふかきよも暁しるき鳴の羽かき

三五 ことはりや羽かく鳴も独のみふしみの小田のさゆる霜夜に

鶉

三六 暮やすき山の陰野の浅ちふに夕風立てうつら鳴也

三七 あれぬれはいとふか草しけき野に里ともいはす鶉鳴也

菊

三八 ときはなる山路の菊も大方の秋は折知露やをくらん

三九 いろ／＼の花は笹にうつろへと猶さかりまつ庭の白菊

四〇 秋も今は末葉に咲る白菊の花こそ花のかたみ也けれ

四一 置露にいくよの月をやとすらん盛久しき白菊の花

四二 澄月の光をそへて白菊の花はよるこそ色まさりけれ

四三 終夜ひかりは霜をかさぬれと月には菊のうつろはぬかな

四四 置露やつもりて色に出ぬらん庭の白菊移ひにけり

四五 をく露も同じ色なる白菊を紫深くいかにそむらん

紅葉

四六 見るまゝに色こそまされ夕時雨ふるの山への秋のもみちは

芳家

平俊職 ことはりや―縦線一本ニテ抹消

顯氏

西円

一二一オ

隆栄

長時

重時

能清

清時

光行

時朝

仙覚

三品 一二一ウ

三三 柞原一村雨の跡よりそはしめて秋の色は見えぬる

三六 夕附日入山もとや時雨るらんまゆみの岡の秋のもみちは

三九 分きつる麓の雲の村時雨かへさの道は紅葉しにけり

四〇 かけ見ゆるもみちの下の小篠原つれなき色の露そ移ふ

四一 紅葉するよその梢のなかりせはつれなき松もしられさらまし

四二 外面なるえの木のもみち中／＼にをのれとうすき色はめつらし

四三 つくはねのこのもかものしけみ迄時雨にもれす紅葉しにけり

四四 秋ふかきしのたの杜の夕時雨ちゝの紅葉のしたはのこさす

四五 紅葉するやしほの岡の夕附日うつるもふかき秋の色かな

四六 村時雨いたくなそめそもみちはのちしほはもろき色としらすや

四七 ときは木の岩ねにのこる下紅葉吹も忘よ木枯の風

四八 千早振神なひ山の秋風に木々のもみちやぬさとちるらん

暮秋

四九 くれて行秋のかたみは大井川井関にとまる紅葉也けり

五〇 暮て行秋風寒しさよ衣たつたの山も霜やをくらん

五一 長月のかさなる秋のくれとてもおしむ心のかはりやはする

九月尽

五三 風吹はやすくもかへる葛のはにとまらぬ秋をいかてなさまし

隆 弁  
行 念

禅 信  
芳 季  
政 村

入道大納言  
家 弁

西 円  
「三三」

蓮 生  
信 生

公 禅

紀 行兼

神 行郊

入道大納言  
左衛門佐

三三 までしはし西の山への夕附日くるれはくるゝ秋としらすや

基隆

三四 くやくしくそ身はならはしの心もて秋の別をおしみ初ける

順眞 『二三ウ』

三五 老かよのなこり露けき袖の上を思ひもしらて秋や行らん

光行

三六 行年のかさなる末は哀也月をおしまぬ秋はなけれと

三七 暮はつる秋のこよひのかなしきは月をたにみぬこよひ也けり

基綱

〔七行分空白〕

『二三オ』

東撰和歌六帖第四

冬

初冬

三九 木葉ちる秋もくれにし片岡のさひしき杜に冬はきにけり

鎌倉右大臣

四〇 片岡のならの落葉に霜ふりて外山さひしき冬はきにけり

入道大納言家左衛門佐

四一 さひしさをいかにしのへと独住太山の里に冬のきぬらん

素遲女

四二 このねぬる朝風さひしから衣たつたの山に冬やきぬらん

淨意

時雨

四三 村雲のしくれさりせは神無月冬のはしめをいかてしらまし

円勇

四四 定なき時雨の雨のいかにして冬の始を空にしりけん

眞昭 『二三ウ』

四五 初時雨ふりみふりすみけふよりは定なきよそいと、<sup>(た)</sup>らるゝ

尼淨真

四六 ふきまよふ風にさきたつ浮雲のはてはしくるゝ神無月哉

雅有

をとつるゝ今朝の時雨に袖ぬれて猶さへかこつ神無月哉

此哥はあひしりて侍けるわらはのかしらおろ(し侍カ)るよし

申をこせて侍ける折しも時雨のし侍ければ返事にそへてつかはしける

明やらてね覚よなかき手枕に泪のかきりふる時雨哉

露ふかき秋のね覚の袖の上を思ひ出よと降時雨哉

神無月しくるゝたひにね覚して長夜しもそ夢はみしかき

山ふかき杉の廬の村時雨うき世の夢をおとろかせとや

すゝなる遠のたかねは雲晴てこゆへき山に降時雨哉

はれのほる雲の跡ふく山風に高ねはいまた打時雨つゝ

落葉

千早振神無月とや手向山もみちのぬさもとまらさるらん

水上に残りし秋の色たにも流て過る瀬々のもみちは

もみちはのちりしく苔のさ蘼をかさねてはらふ山風哉

庭の面の\*本ノマ、をたにも見るへきに猶さそふ也山風の風

うしやけに四方の嵐も心してさそひなはてそ庭の(みカ)もちは

霜

岩代の松は昔のみとりにて幾よのしものむすひきぬらん

玉串の葉分の霜をふく風にゆふしてなひくかもの神山

法印定清

基政

公朝

泰時

素暹  
「二四オ

高階重氏

蓮生

能清

隆弁

実時

□右衛門督

□「茗」ノ下ニ「土」又ハ「匕」  
ヲ書イタヤウナ字、「落は」ノ誤  
字カ

円勇

実時  
「二四ウ

三〇 三室山神のしめゆふ榊はにやたひ霜置冬はきにけり

三一 夜を(一字分望)誰こえつらんうつの山霜に跡ある葛の下道

三二 ちりつもるならのひろはに音信て置霜はらふ木枯の風

三三 あらち山嶺より寒る松風に矢田のゝ浅茅霜もこら

### 枯野

三四 さをしかの妻とふ声も絶はてぬ真野の萩原霜枯しより

三五 露なから手折し秋や思ひ出る霜枯はつるのへの萩原

三六 真葛原小野の浅茅も霜枯てうらさひしかる風の音哉

三七 霜かれの草の袂のうすければ冬野の薄風もたまらず

三八 雪ふれば枯野の草もうつもれて今日や雉子のねやもとむらん

### 寒蘆

三九 風をいたみおれふす芦のかたよりにいくよかさねて霜枯ぬらん

四〇 芦葉はさはへもさやに置霜の寒きよな／＼氷しにけり

四一 霜枯の玉江の芦に風さえてしたねもとけす氷比かな

### 冬月

四二 しくるへきけしきは少時くもれ共出ればはるゝ山のはの月

四三 天の原時雨て過る村雲にをくれさきたつ山のは(月カ)

四四 ふる雪に道絶はつる太山よりしるへもなくて出る月影

法眼快通

重時

圓行

実時

三品親王

時直

泰時  
「二五オ

長時

鎌倉右大臣

丹波忠茂  
朝臣

政村

□直

基輔



三九五 あらし吹たかねの月はすみかまの煙の上もくもらさりけり

三九六 さよ衣すそのゝあさち霜枯て月吹すさふ木枯の風

三九七 冬枯のま柴の廬頭れて太山も浅き月の色哉

三九八 山風(一字分替)に霜夜の寒しよりひとりとは過ぬ椎柴の廬

三九九 夜を寒み氷にけりな池水の底には月の影もうつらす

四〇〇 寒る夜もよとまぬ水の早瀬河水るは月の光也(りカ)け□

四〇一 かく斗世にひすましき我袖に何かはやとる冬のよの月

千鳥

四〇二 鳴海かた月かたふけは朝汐の沼に立そふ衛鳴也

四〇三 月影のさし出の磯のはま衛氷てよする浪に鳴也

四〇四 冬寒み衛鳴也汐風の浪に吹しく松か浦嶋

四〇五 冬のよの汐風寒みなみつま不審(ママ)かうかのしまに衛鳴也

四〇六 さよ衛のこのうら風たち別行衛もしらぬ浪に鳴也

四〇七 住吉のうらの松風さよ更て千鳥とわたるあはち嶋山

四〇八 夜を寒み浦風さやくさしまの磯こす浪に衛鳴也

四〇九 舟留る虫明の磯のはま衛うら風寒くよはに鳴也

四一〇 霜枯の玉江の芦のよを寒み氷る汀に衛なく也

四一一 さし帰るあはちのせとの夕塩に又立さはく友衛哉

定承

基綱 『二五ウ』

政村

願海法師

真昭

□雅

定員

蓮生

三品親王

西円

藤安経 かうーアルイハつら誤字カ  
『二六オ』

光西

素暹

忠直

鎌倉右大臣

三品親王

政村

四二 高砂のみなともふかく満汐に川上さして衛鳴也

四三 冬河の岩なみ氷るよな／＼も猶ゆめのこる村衛哉

四四 故郷のさほの川風更夜にさひしかれとや千鳥鳴らん

### 水鳥

四五 駕鳥のをのか羽風やさえつらんおりある水そ先氷ぬる

四六 難波江のあしのはかくれ住駕の浮ね顛し汐満にけり

四七 月清みをのか影そふ池水に妻なき駕や友ねしつらん

四八 池水の氷のこさぬ芦まより空にうきたつすかの村（鳥カ）

四九 水行芦まのよとこあらはにてけさは浮ねの池の村鳥

五〇 たかせさす氷の音にさよ更て綱手にちかふあちの村鳥

### 水

五一 水鳥の玉もの枕それなから浪にむすへるうす氷哉

五二 芦鴨のたちゐにさはく跡斗氷もはてぬ冬の池水

五三 なかれ行もみちを結ふ山河の水そ秋の色をとむる

五四 ちりつもる木葉に浪の音絶てこほるもしらぬ山川の水

五五 したつるゝ方やなからん浅き瀬のさなから氷る山河の水

五六 卷向の檜原にさゆる山風や穴師の河のこほりなるらん

五七 とをつ川みなかみふかき山風に幾瀬の浪のこほりいつらん

□（西カ）  
円

基隆

成慶

二六ウ

基綱

光行

素暹

圓行

圓榮

泰時

行念

基政

蓮生  
「二七オ

源義

敵雅

三品親王

善真

四六 佐保河のさゝれの氷柱かさねてや冬の日数のさえまさるらん

政村

四九 衛鳴さはの河風寒ぬらしさゝれの氷解やらぬ送

三品親王

四〇 夜を寒み川せにうかふ水の淡の消あへぬ程にしにけり

鎌倉右大臣

四三 冬寒み汀の水とちてけりなみも音せぬしかのから崎

長雅

四三 渚こくたなゝしを舟跡見えて氷くたくるしかのから崎

芳家

四三 こほり行汀も遠く風寒て尾花に残るまのゝ浦浪

一二七ウ

四四 (一字空白みカ)ふね山おろす嵐の寒ければ漣の上こそ氷しにけり

公朝

四五 奥州のとふのすかこもさゆるよやあさかの沼は氷しつらん

房円

網代

四六 秋の色をしのふともなき網代木に何とて残る木

□ 兼

四七 たなかみや網代をくゝる白浪のよせてかへらぬ氷魚そのこれる

□ 時

四八 網代守楨の嶋人幾夜かも氷る汀の月をみるらん

嚴雅

四九 夜を寒み川せの水は氷るて月そなかるゝ宇治の網代木

能清

四〇 年波のよるをもしるや網代守はやく浮世に日をかそへても

顯氏

霰

四一 おちのこるさ山かすそのならのはに朝風寒て霰降也

素暹

四二 時雨つる外山の嶺の村雲に夕風寒てあられふるなり

基隆

四三 絶々にしくるゝ雲を送りきて霰に成ぬ山風の風

和空

「二八オ

四四 雲をくる嵐にさはく篠のはのさやまかすそに霰降也

四五 山風に霰おちゝるたましまのこの河上深雪降らし

四六 いせ嶋や汐干のかたにふる霰ひろはゝ玉の数やまさらん

四七 つゆならてとれはとらるゝ白玉のかつ消ぬるは霰也（りカ）

霰\*

四八 雪ませに雨は降きぬ足引の山の雫もかつこほらん

四九 みそれとそしらすはいかゝさためまし雨にもあらず雪としもなし

鷹狩

五〇 はしたかのゆふかり衣白妙に雪降しほるうちの山風

五一 （二字分空白）のや雪ふりはへてかへるさに雉子鳴也遠の村柴

五二 御鷹居朝ふませんと此夕とまるのはらにかりね也

五三 天河宿かす人もなき物をかたのゝみかり日はくれ（にけりカ）

雪

五四 降初てまたひとへなる白雪のふかきは庭の木葉也（けりカ）

五五 風さえてひさしく成ぬ白雪のけふ降つもるかもの瑞籬

五六 神代よりかはらぬ色も埋れてをしほの山の松の白雪

五七 雪ふれはさらぬ梢もゆふかけてしられぬ物を三輪の神杉

五八 水鳥の音羽の山のつれなさを色かへてふるけさの白雪

行 念

実 泰

忠 宮 道

画 覚

霰一雲ノ誤カ

顯 氏

淨 意

二八ウ

親 行

素 暹

〓

〓

素 暹

三品親王

重 時

一三〇オ（前文簡集書第五條参照）

四九 打よするなみともわかす住吉のつもりの浜にふれる白雪

四〇 白妙の雪は梢をうつめともなみにみとりの松か浦嶋

四一 名にしおへはあまきる雪も白妙に今朝はつもりの浦風そ吹

四二 うつもるゝ浦のはまゆふ朝なゝ雪も幾重の日数をそふる

四三 沖つ浪あれて日数の降雪にたえたる海士の

四四 舟留る大江の岸のさゆる夜に生駒の嵐

四五 降雪につれなく残る色もなし時雨し迄そ嶺

四六 爰にして花かこみれば白鳥のとは山松に雪降に(けりカ)

四七 今朝みれば名に願れて白鳥の鷺坂山に雪降にけり

四八 けさみれば風もはらはぬ竹のはにをのれをもれて雪そこほるゝ

四九 吉野山梢は花にかはらねと雪ふりぬやと問人もなし

五〇 吹風になひかぬ雲や葛城のたかまの山に積る白雪

五一 白雲の所もさらぬよしの山嶺の木末に雪や降ら(ん)

五二 里人のにまのかよひち跡みえて雪にもこゆるき(の中山カ)

五三 さらぬたに月待かねし山のはかさねて高くつもる(白カ)雪

五四 冬ふかく成そしにける鈴鹿山嶺の白雪ふりつもりつゝ

五五 しなのなるきそのあさ衣さゆるよにいかにかきの雪つもるらん

五六 ふけゆけは寒つる四方の山風に音せてつもる庭の白雪

光西

淨意

行茂

願海

清成

行念 『三〇ウ』

法印良念

良暁

(親カ) 行

鎌倉右大臣

政村

資親

四七 おとろきてけさこそみつれ白雪のしらすよのまにつもりけるとは

重時

四八 雪ふらはとはんといひし里人やけさは山路に分迷ふらん

西円 二九〇

四九 問人の道のしるへと成ぬらん我ふみ分し谷の白雪

政村

五〇 雪ふかき岩まのおくの住るにも契し人のあとは見えけり

隆弁

是は（一字分空白、岩カ）間に籠りて侍ける時雪のあした人の尋て

来て侍ければよみける

六一 ふる雪はけふみかの原晴やらて国の都そ跡絶ぬらん

円勇

六二 庭の雪つもりぬ程はまたれつる人のたの跡

六三 庭の面は跡なしとてもいかせん我身に積る雪（雪カ）かな

六四 けふも又独詠てくれにけりたのめぬ宿の庭の白（雪カ）

鎌倉右大臣

六五 とはれぬも身にしられぬことはりを思ひ忘るゝ庭の白雪

忠時

六六 （三字分空白）ぬ庭の雪こそかなしけれむかしは跡をいとひし物を

光行 二九ウ

六七 ふる雪にふみたかへたる跡なれとはれかはなる庭の面

行

これは雪のあした人のもとより外へやる

きたりければよめる

六八 風そよく庭の篠垣隙をあらみ枕を埋よはの

六九 事とひし嵐も人も音絶て軒はの松

七〇 爪木（一字分空白、こるカ）しつはた山のかよひちも跡こそ

咒一

心あれはえそふりすてぬ武士のいむけの袖に

神楽

〔二行分空白〕

〔半葉白紙〕

〔

二三  
ウ

二三  
ウ

# 索引

一、今回翻刻した本文とそこに付した歌番号によって初二句索引と作者索引とを作成し、左に掲げる。

二、初二句索引は、本集のすべての歌の初二句を採り、それを歴史的仮名遣の五十音順に排列した。その際、判読不能部分には、適宜推測したところを加味した。

三、作者索引は、本集のすべての歌の作者名を採り、それを慣用読みの現代仮名遣の五十音順によつて排列した。従つて俗人男子は訓読み、僧俗は呉音読みを原則とするが、姓や官位が不明もしくは僧俗未詳の者や難読の人名など、やむを得ず漢音読みで排列したものもある。

なほ、番号を括弧に入れたのは、その作者の作か否か多少の問題がある歌で、これらは末尾の「頭字不明・作者不明」の該当項目にも重出させておいた。

## 初二句索引

### あ 行

あかしがた	こきゆくふねの	二四	あきのよの	ゆらのとなかに	二六	あけぬとて	よこくもいそく	二六
あかしがた	しまのこなたの	三三	あきはきの	ふるえのはなも	三三	あけぬれは	なはいりやらて	二七
あきことに	かせをたよりの	二六	あきはまた	あささはをのの	二四	あけやらて	ねさめよななき	二七
あきつすや	くにことわさ	二〇	あきふかき	しのたのりの	二四	あけゆかは	にはひやそてに	二七
あきのいろを	しのふともなき	四三	あきもいまは	あすかのかはに	三〇	あけゆけは	もゆるはたるの	二六
あきのよの	なからのはまの	二八	あきもいまは	すゑはにさける	三〇	あけわたる	かたののおきの	二六
			あきをへて	すかのあらのに	二六	あさちふの	をのへのみやは	二八



「東撰和歌六帖」(福田)

あさひさす	のきはのたるひ	三	あまのはら	しくれてすくる	三九三	いつしかと	ねさめのとこの	二〇四
あさほらけ	とほきやまへの	九	あまのはら	ふりさけみれは	二六八	いつもたつ	あまのとやまの	一四
あしかきの	まちかきやまの	三	あやめくさ	おなしよとのの	一四四	いとはやく	かすみそそむる	七
あしかもの	たちゐにさわく	四三	あやめふく	さつきけふや	一四五	いはしろの	まつはむかしの	三七八
あしのはは	さはへもさやに	三九〇	あらしふく	きひのなかやま	二九〇	いはつつし	さきにけらしな	六〇
あしひきの	やまたのいねの	三八	あらしふく	たかねのつきは	三九五	いりひさす	たのものはなみ	三三〇
あしひきの	やまのあきかせ	三六	あらしふく	やよひのすゑの	六八	いろいろの	はなはまかきに	三三九
あしひきの	やまのあなたも	四四	あらたまの	としやそとより	三二	うかひふね	あかつきやみを	一七〇
あしひきの	やまのはるかせ	三三	あらちやま	みねよりさゆる	三六三	うかひふね	さをさすなみの	一五九
あしろもる	まきのしまひと	四六	ありはてぬ	うきよのなかの	三二五	うきことは	もとのみにして	五一
あたにみる	たくひなれとや	三九	あれにたる	ふるさとからと	二九	うくひすの	ふるすにかて	三
あつさゆみ	はるたつのへの	三三	あれぬれは	いととふかくさ	三七	うくひすは	はやなかましを	三七
あつまより	せきこえてくる	六	あれはてて	まかきもみえぬ	一六九	うしやけに	よものあらしも	二六
あはれまた	いかになかくむ	二七	いかにせむ	かすみのそての	七三	うたたねの	よるのまくらに	二七
あふさかの	すきのしたみち	二六	いかばかり	よものくさきの	二三五	うちなひく	をはなかくすゑに	二七
あふさかの	せきのしみつも	二九	いくさき	つらさにたへて	二六	うちよする	なみともわかつ	四九
あふさかの	やまへてらせる	二七	いくさとも	おなしなかくや	五四	うつしうゑし	にはのこはきそ	二四
あふさかの	とりのねおそき	二二	いけみつ	こほりのこさぬ	四八	うつつとも	おもひそわかぬ	一〇一
あふひくさ	かつらにかけた	九四	いせしまや	しほひのかたに	四四六	うつもるる	うらのほまゆふ	四六三
あまのかは	いはこすなみや	二二	いせしまや	しほひのかたに	一八五	うはたまの	よとののあやめ	一四〇
あまのかは	やとかすひと	四五	いたつらに	つきのさかりは	一五三	うみやまの	かすむけしきの	二
あまのすむ	さとのけむりも	二六	いつくにか	すきぬるなつの	二〇九	うめのはな	かさにぬふてふ	二
あまのすむ	さとのしるへの	二五	いつくにも	はつねやおそき	九八	おいかよの	なこりつゆけき	三五
あまのとの	あけゆくそらの	二三	いつしかと	かすみもあへす	五	おきつなみ	あれてひかすの	四六三

おきてみる	三〇
おきまよふ	二七五
おくつゆに	三三
おくつゆも	三三
おくつゆや	三三
おくつゆを	二七四
おくもなき	二九
おたかすゑ	四三
おちのこる	四二
おとつるる	三六
おとにきく	二七
おとろきて	四七
おなしえに	一八
おなしえに	一九
おはかたの	七
おほふねの	二五
おもひやる	三三
か行	
かきくらし	一六
かくはかり	四二
かけみゆる	四〇
かすかなる	二二
かすめたた	四七
かすめとも	四八
ほとたにまたぬ	
つゆのしたをき	
いくよのつきを	
おなしいろなる	
つもりていろに	
はらはぬまては	
いははのとひら	
あさふませむと	
さやまかすその	
けさのしくれに	
をきのうははの	
けさこそみつれ	
あしわけをふね	
したやすからぬ	
ならひにかへて	
かとのりのおきに	
そてもつゆけし	
なほふるゆきの	
よにひすましき	
もみちのしたの	
たたひとこゑは	
はるならぬよの	
いかてしらまし	

かすめとも	三
かせさえて	四五
かせさむみ	二四
かせそよく	四八
かせのおと	三〇〇
かせのおとも	一九八
かせふけは	一九二
かせふけは	三三
かせわたる	三六
かせをいたみ	三六
かそへみは	二二〇
かたをかの	三九
かはりゆく	二〇八
かみなつき	三六
かみまつる	八五
かみより	四六
かむなひの	二七
かやりひの	二六二
かやりひの	一六〇
かりかねの	五
かりのある	三七
かれぬとは	三三
かななつき	
きふけふ	三〇三
またしたとけぬ	
ひさしくなりぬ	
たのむかけのの	
にはのしのかき	
くものけしきも	
あきにさきたつ	
はたるみたるる	
やすくもかへる	
あきのたのもの	
をれふすあしの	
たたるものりの	
ならのおちはに	
つきひとはかり	
しくるたひに	
うつきになれは	
かはらぬいろも	
いはせのりもの	
けふりのすゑや	
けふりもいまは	
かへるもおのか	
かたのいなは	
ひことにみれと	
かみなつき	
うつつつせみの	

きみにのみ	九
きりきりす	二四五
きりきりす	二四三
くたりせに	一九八
くまのちや	四四
くもおくる	四四
くもはみな	四六
くもはらふ	二五七
くやしそ	三五四
くるかりは	二六
くれかかる	二六
くれたけの	三〇四
くれてゆく	三五〇
くれてゆく	三四九
くれはつる	三五七
くれやすき	三六
けさみれは	四六八
けさみれは	四六
けふととも	八三
けふとてや	一九四
けふもまた	四八四
けふゆきて	三八
こきかへり	六六
ここにして	四六六
おもひをかくる	
たれかまざると	
なくをわかみの	
いまなりぬらし	
しのたのもりの	
あらしにさわく	
あまつあらしに	
みやまおろしに	
みはならはしの	
ふしみのをたに	
やよひのすゑの	
すゑはよなかき	
あきかせさむし	
あきのかたみは	
あきのこよひの	
やまのかけのの	
かせもはらはぬ	
なにあらはれて	
をりなつくしそ	
むろのとひらを	
ひとりなかつて	
いさをりとらむ	
みてこそゆかめ	
はなかとみれは	

「東撰和歌六帖」(福田)

さしかへる	ささかにの	さくらのはな	さきにけり	さきそめし	さかぬまは	さかきさす	さ行	ころもてに	ころもうつ	こよひわか	こほりぬし	こほりゆく	こほりゆく	このはちる	このねぬる	このころは	こぬひとを	ことわりや	こととひし	ことさく	ころから	ころろあれは	このへの
あはちのせとの	たまぬくいと	ちりかひかすむ	たれにみせまし	むかしのあきを	くさにやつれし	うつきぬれは		かよふもすすし	きぬたのおとの	あやめのまくら	たにのをかはの	みきはもとほく	あしまのよとこ	あきもくれにし	あさかせさひし	しのにみたれて	うらむるまでは	はねかくしきも	あらしもひと	わかきのうめの	ふるすたつぬる	えそふりすてぬ	くもゐをわけて

四二	三九	五	六五	三三	一七〇	八一		一九六	四二	一〇	四三	四九	三六	三七	三六	三三	三三	三三	三三	三三	四九	三六
----	----	---	----	----	-----	----	--	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

しかのねは	さをしかの	さをしかの	さをしかの	さらぬたに	さらぬたに	さらぬたに	さらぬたに	さよちとり	さよころも	さゆるよも	さもこそは	さみたれは	さみたれは	さみたれの	さみたれの	さみたれの	さほかはの	さひしさを	さとひとの	さとはあれぬ	さつきには	さつきとも	さためなき
こなたかなたに	つまとふこゑも	たちののはらの	おのかすむの	ゆくすあいそく	ものおもふころの	ほすまもしらぬ	つきまちなねし	のこのうらかせ	すそのあさち	よとまぬみつの	いろふかからめ	ふれとふらねと	なほやましなの	そらにけふりは	ころはよしのの	はすゑもみえす	さされのつらら	いかにしのへと	にまのかよひち	はるはむかしの	なきもふりなむと	いはてのもりの	しくれのあめの

三三	二七	二六	三九	四七	三六〇	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三
----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

すみよしの	すまのうらや	すそのなる	すすろなる	すすしきの	しろたへの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの	しらつゆの
うらのまつかせ	さためぬあまの	あさちいろいろ	をちのたかねは	たたちもみえぬ	ゆきはこすゑを	とはたのさとも	うちこきたれて	かことなかけそ	いろさへけさは	ところもさらぬ	あさのさころも	にはのあさちの	のへのすみかの	たまえのあしの	くさのたもとの	やまたのさなへ	わかみのほとを	きそのあさきぬ	てひきのいと	かたやなからむ	とやまのみねの	けしきはしはし	

四七	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

すむつきの ひかりをそへて  
 そてのかは はなたちはなに  
 そともなる えのきのもみち  
 そのかみに こころそかけし  
 そらにこふ あめまちえたる  
 そらはなほ まきのおやまの  
 た 行  
 たえたえに しくるるくもを  
 たかかたに よるとちきりて  
 たかきこの みなともふかし  
 たかさとに つきをまつらむ  
 たかせさす こほりのおとに  
 たかまとの みやのうくひす  
 たちこむる のさはのきりの  
 たちこむる はるのかすみの  
 たちそむる はるのかすみの  
 たつねきて おちほひろはむ  
 たつねきて のきはのうめに  
 たつはるの ねのひのこまつ  
 たてそめし くるすのわかな  
 たなかみや あしろをくくる  
 たなはたの あひみるよはの  
 たなはたの あまのはこころも  
 たなはたは けふゆきあひの

三三  
 二七  
 三三  
 二五  
 二六  
 四七  
 三三  
 二二  
 二四

たまくしの はわけのしもを  
 たまくらに よわりなはてそ  
 たまくらに つゆのしつくを  
 たまさかに みるものにもか  
 たれうゑて むかしをいまに  
 ちとりなく さほのかはかせ  
 ちはやふる かみなつきとや  
 ちはやふる かむなひやまの  
 ちりつもの このはにみ  
 ちりつもの ならのひろはに  
 ちるはなに なれしかたみを  
 つきかけの さしてのいその  
 つきかけも みにしむころの  
 つききよみ おのかかけそふ  
 つきすめは みねのうきくも  
 つきすめは もしほもやかぬ  
 つきにたに しられぬゆめや  
 つきを見る あきはしくれの  
 つくはねの このもかのもの  
 つつしきく やましたひかけ  
 つまき（こるカ）しつはたやまの  
 つゆしもの おくてのやまた  
 つゆなから たをりしあきや  
 つゆならて とれはとらるる

三七九  
 二四六  
 二四六  
 二八四  
 一三〇  
 四九  
 三七九  
 四四六  
 四四六  
 三六二  
 四三  
 三七  
 四七  
 二七三  
 三〇六  
 一六四  
 二九四  
 三四三  
 六三  
 四〇  
 二七〇  
 三六五  
 四四七

つゆふかき あぎのねさめの  
 つゆむすふ まさきのかつら  
 てれはおき くもれはおかぬ  
 とししあれば にまのさとひと  
 とししらぬ やまかせえて  
 としはいま さつきになれや  
 ときはきの いはねにのこる  
 ときはなる やまのきくも  
 としことに おなしわかれを  
 としなみの よるをもしるや  
 としをへて ねりそくちゆく  
 とはれぬも みにしられぬる  
 とふひとの みちのしるへと  
 とへかしな むらさめそく  
 ともしして いるさのやまの  
 ともしする みやまかくれに  
 とをつかは みなかみふかき  
 な 行  
 なかきひも ゆふくれまたぬ  
 なかきよの ふけゆくかねは  
 なかつきの かさなるあぎの  
 なかめやる いそへはきりの  
 なかめやる そらにけふりは  
 なかめやる むかひのさとの

三六八  
 二七六  
 二七六  
 一七六  
 一三三  
 三五  
 一五四  
 三四七  
 三六  
 七四  
 四四〇  
 三〇二  
 四八五  
 四七九  
 一五  
 一五  
 一五  
 一五  
 一五  
 一五  
 一五  
 一五  
 一五

「東撰和歌六帖」(福田)

ななれゆく	もみちをむすふ	四三	はつしくれ	ふりみふりすみ	三六	ふきかへす	をかのくすはは	二〇
なきさこく	たななしをふね	四三	はなさそふ	うちのかはなみ	六九	ふきまよふ	かせにさきたつ	三六五
なつなれは	そらはゆきけも	八九	はなすすき	くさのたもとに	三四	ふくかせに	なひかぬくもや	四七〇
なつはた	うつせみのよの	二〇五	はなそめの	そてのわかれに	七	ふけゆかは	つきもいりなむ	二五
なつふかく	しけるのさはの	一八二	はなちりし	あともみえす	一五	ふけゆけは	さえつるよもの	四七六
なつふかみ	しけるくさはの	一六五	はなはなほ	しをれなからも	三三	ふねかよふ	たかせのよとの	一四七
なつやまの	みねのこすゑや	一七三	はなもちり	はるもくれゆく	七	ふねとむる	おほえのきしの	四六四
なにことを	おもひのこして	二八一	ははそはら	ひとむらさめの	三七	ふねとむる	むしあけのいその	四〇九
なにしおへは	あまきるゆきも	四六一	はらへする	よのふけゆけは	二〇〇	ふねよせて	かさしにをらむ	六一
なにとなく	あきはころの	三六〇	はるきても	ふくやあらしの	元	ふゆかはの	いはなみこほる	四三
なにとなく	すすろにもの	三六	はるさめの	ふるののわかな	六	ふゆかれの	ましはのいほり	三九七
なにはえの	あしのはかくれ	四六	はるといへは	まつさくはなの	四〇	ふゆこもり	はるたちくらし	一
なもつらし	くるれはつゆの	二七一	はるのよの	あけかたちかき	四九	ふゆさむみ	ちとりなくなり	四〇四
なるみかた	つきかたふけは	四〇三	はるふかみ	はなちりかか	五	ふゆさむみ	みきはのこほり	四〇一
にはのおも	おちはをたにも	三七六	はるやあらぬ	つきはみしよの	五〇	ふゆのよの	しはかせさむみ	四〇五
にはのおも	あとなしとても	四八三	はれのほる	くものあとふく	三三	ふゆふかく	なりそしにける	四七四
にはのゆき	つもらぬほとは	四八二	はれやらぬ	ゆきけのやまの	八	ふりそめて	またひとへなる	四五四
ぬまのへの	まこもましの	一三九	ひかすふる	むろのいしまの	一九	ふるさとと	なりにしをの	一六八
ねさめして	いまそききつる	一〇四	ひくらしの	なくねもすすし	一九	ふるさとと	たれしのへと	四一
ねさめとも	またなみたとも	二五九	ひさかたの	あまきるさりの	二六	ふるさとと	さほのかはかせ	四二四
ねのひして	きみをそいふ	二四	ひさかたの	あまてるつきの	二九	ふるさとの	にはのなつくさ	一六七
は行			ひととはぬ	のきはむくらの	二九	ふるゆきに	つれなくのこる	四六五
はしたかの	ゆふかりころも	四五〇	ひとりきく	みねのあらしを	三六	ふるゆきに	ふみたかへたる	四八七
はつくさは	したにもゆれと	三四	ふかきよの	かへにうらむる	四七	ふるゆきに	みちたえはつる	三九四

ふるゆきは	けふみかのらは	四六一	みつとりの	たまものまくら	四二	もしはやく	うらのしるへも	一五
ほととぎす	こてふににたる	二三	みてもなほ	しくものそなき	一七三	もしはやく	けむりふきしき	一八
ほととぎす	こゑきくときに	二三	みなかみに	のこりしあきの	三七四	もみちする	やしほのをかの	三三
ほととぎす	つきにかたまつ	二二	みなれても	もとのふちせや	三二	もみちする	よそのこすゑの	三三
ほととぎす	なくやさつきの	二四	みにさむぎ	かせにつけてや	三〇三	もみちはの	ちりしくこけの	三五
ほととぎす	ほのめくさよの	九	みふねやま	おろすあらしの	四四	や		
ほととぎす	よとのわたりに	二五	みむろやま	かみのしめゆふ	三八〇	やまかせに	あられおちちる	四四
ほととぎす	やまたのさなへ	一四	みやまの	なつこのくさを	八六	やまかつの	(空白)しもよの	三八
ほにいてぬ	をはなかもとの	一四	みるまに	いろこそまされ	三六	やまさとの	しつはたぬのを	八
ま行			みわたせば	ちくさのはなの	二四〇	やましろに	しつかそてかき	八
まくすはら	をのあさちも	三六	むかしおもふ	はなたちはなの	二九	やまのはの	くくるほとなく	二二
まきむくの	ひはらにさゆる	四六	むかしにも	かはらぬものは	二八二	やまひこの	こゑもかはらす	二二
またれつる	こころよわさも	一〇五	むかしより	ひかけもささぬ	一九三	やまふかき	すきのいはりの	二九
まちかねし	こころならひに	一〇〇	むさしのの	のなかのもりの	一八	やまふきの	はないころも	三五
まつらかは	かはなみとほく	二八九	むはたま	うはたま		やまふきの	はなのちるをや	五九
ましてはし	にしのやまへの	三五	むらくもの	しくれさりせは	三六	ゆきぎえぬ	たにもはるは	七
みしかよの	なかにめにあかて	九	むらさきの	ねはふよこのの	一九	ゆきのうちに	こほらぬなみや	九〇
みそきする	うきてなかるる	二〇三	むらさきの	ふちさくやまの	六四	ゆきのうちに	はるしるものは	二
みそきする	けふとはしりぬ	二〇二	むらさめの	はれまにつきは	二二三	ゆきのうちに	ふるすたちいて	四
みそらゆく	かせをたよりの	二六三	むらしくれ	いたくなそめそ	二四三	ゆきふかき	いはまのおくの	元
みそれそと	しらすはいかか	四九	もえいてて	またうらわかき	二四六	ゆきふらは	とはむといひし	四〇
みちのくの	とふのすかこも	四三	もしはやく	いちのとまやに	二九三	ゆきふらは	かれののくさも	四六
みちのへの	さとのこすゑに	八三			三六			三八
みつとりの	おとはのやまの	四六			一八六			

ゆきふれは　さらぬこすゑも  
 ゆきませに　あめはふりきぬ  
 ゆきむかふ　をちかたひとの  
 ゆくすゑも　おもひしられて  
 ゆくとしの　かさなるすゑは  
 ゆくはるを　ひとよへたてて  
 ゆふかくる　みむろのさかき  
 ゆふされは　あきかせかよふ  
 ゆふされは　くさはのつゆを  
 ゆふたちの　あめのなこりの  
 ゆふたちの　すぎぬるあとの  
 ゆふたちの　すすしくはるる  
 ゆふたちの　しつかかけひに  
 ゆふたちや　いるやまもとや  
 ゆふつくひ　ほのかにみえて  
 ゆふつくよ　をかのしはふの  
 ゆふひさす　こすゑははなに  
 よしのやま　はなはよのまに  
 よしのやま　きくたにかなし  
 よそなから　つれなかりけり  
 よひのまは　いりえのなみに  
 よふねこく　しをるるあまの  
 よもすから　ひかりはしもを  
 よもすから　うらかせさやく  
 よをさむみ

四七五  
四八  
三二  
三〇六  
三三  
七六  
八四  
一九〇  
二五五  
一九七  
一七四  
一八二  
一九  
三六  
九三  
二四四  
四六九  
五  
三三  
二四  
一八七  
一七五  
三三  
四〇八

よをさむみ　かはせにうかふ  
 よをさむみ　かはせのみつは  
 よをさむみ　こほりにけりな  
 よを(以下欠)　たれこえつらむ

わ　行

わかなつむ　いさひとまねに  
 わかやとに　いまかきなかむ  
 わかやとの　にはたにふかき  
 わかやとの　にはのあきはき  
 わけきつる　ふもとのくもの  
 わすれすは　うらむるひとも  
 わたりする　よとのかはせの  
 をきはらや　やまかけくらき  
 をしかふす　みねのくすはら  
 をしとりの　おのかはかせや  
 をしむへき　こすゑのはなは  
 をちかたの　やまかくれゆく  
 をちかへり　むかしきたらへ  
 をちこちの　やまのはつつく  
 をとめこか　つけのをくしは  
 をはすてや　つきすむよはの  
 をみなへし　つゆのぬれきぬ  
 をみなへし　(二句以下欠)

四〇  
四九  
三九  
三六  
七  
七  
一六  
三三  
三九  
三七  
一四  
二六  
二六  
四五  
七  
二〇  
二三  
二四  
二五  
二七  
三五  
三六

(空白)ぬ　にはのゆきこそ　四六  
 (空白)のや　ゆきふりはへて　四二

作者索引

あ　行

顯氏(藤原)　八・二四・九三・三五・三三・四〇

・四四

家仲(高階)　二六・二三・五三・二八・二〇・三五

・三九・二六・三〇

右衛門督(三品親王家祐)　二〇

円勇(法師)　四三・八四・一一・四七・五一・一五・

二三・三三・四五・三六・三七・四八

か　行

快遍(法眼)　三六

景家(藤原)　二三

鎌倉右大臣↓実朝(源)

願海(法師)　三九・四六・二

観鐙(法師)　二四〇

基遍　三九

清定(藤原)　一九

行円(法師カ)　二六八

行念(法師)　五・二七・二九・三八・三六・(三)

九・三四〇・四二二・四四・四六八

行口

四八七

清時

三三三

清成

四六七

源義

四三四

謙忠（權律師）

二五四

孝源（權少僧都）

二八

光西（法師）

九二・二・四〇六・四六九

公禪（法師力）

三四九

公朝（權律師）

九・三七・五・二四六・（四九）・三〇・

嚴雅（權律師力）

二四三・二八五・三六六・（三六九）・四四四

さ行

西円（法師）

六六・三六〇・三一・三六六・（三七）・三

四六・四〇四・（四二）・四七八

最信（權大僧都）

一〇八・（一〇八）

左衛門督（入道大納言家）

六二

左衛門佐（入道大納言家）

一七一・三七・五三

三五九

実時（平力）

三七・三七九・（三八〇）・三八四

束朝（源、鎌倉右大臣）

一・二六・七・六・四

五〇・五五・五九・九四・二〇・二六・

六八・二〇五・二〇八・三九・二五・二六・

二六・六四・三七・三五・三九・四〇・四〇

実泰（平力）

一八五・二六三・四四五

三品親王

↓宗尊親王

重氏（高階）

三七三

茂景（藤）

二四一

重時（平）

七・一〇・三四・五七・五九・八九・三七・

一五九・一七九・二六六・二七三・二八七・三〇

・三八・四七七・（四九）・四七七

重教（藤原）

一五・七四

慈信（法師）

九八・一五六

寂意（法師力）

三四・二四四

寂身（法師）

四〇・四四・一六六

順真（法師）

三〇・三六・四三・七三・三六・三一・三五

定 ↓テイ

一〇・三六・八二・三三・三三・三八・

净意（法師）

五九・三二・四四九・四六〇

净意法師女

一五九

成慶

四四四

净心（法師）

七〇

净真（尼）

三六四

証定（法師、澄定同一人力）

六・八五・二八

净忍（法師）

二・七〇

净忍（法師）

二六〇

城忍（法師）

二五三

信生（法師）

六五・一九・二五八・三八

真昭（法師）

一八・二〇・四・二〇・二五・一六五・一六九

一八三・（一八四）・三三・三三・三九・

三三・三三・三六・三九

資親

四七六

仙覺（權律師）

五五・一〇三・三三・四四七

千手丸

二二

禅信（法師力）

三四二

善真（法師力）

四七七

千相丸

六七

善念（法師）

一九〇

素暹（法師）

一七・六・二六・一八九・二五・二九・

二八九・三六・三九・七一・四〇・七四・

素暹女

三六〇

た行

忠員（宮道）

四四六

忠茂（丹波朝臣）

三九一

忠繼（藤原）

一九一

忠時（平力）

二五七・四八五

忠直（藤原）

六九・四八

親行（源）

五・九・四四・（四五）・一五・一五

五・一五九・六一・一六〇・（八一）・二四



「東撰和歌六帖」(福田)

澄定(証定ト同一人カ) 一九五・一九九・(二〇〇)	八・三五・七五・二七・三〇三・三二・
珍譽(法師カ) 二七三	三六・四一八・四五〇・(四七二)
経成(平) 二八八	
定(法眼) 二二七	
定員 四〇一	
定承 二〇六・三九五	
定清(法印) 二〇一・三六六	
定撰 三三六	
時朝(藤原) 九五・二八・二六四・二七六・三〇・三六	
	・三五・三五四
時家(藤原) 三三・七五・三三・三〇八	
時直(平) 九三・三八七	
時仲(平) 一七	
俊職(平) 四六・三三	
な 行	
長時(平) 二四・九三・三九・二四二・九三・三四	
	二五・三六・三九・三六九
長直(藤原) 一四・一四〇	
長雅(花山院宰相中将) 九六・四二	
能海(法印カ) 二七	
信教(藤原) 一三〇	
教定(二条三位、飛鳥井) 二・三三・一七・七	

は 行	五・三二・二七六
兵衛督(入道大納言家) 一七三	
藤行(アルイハ源カ) 二六四	
弁(入道大納言家) 二八・(二九)・四五	
房円(法師) 六二・二五・三六・三六・三三・四五	
ま 行	
雅有(藤原、飛鳥井) 一三・一〇・三五	
政村(平) 八・八・一〇〇・一三八・一七・四二・二	
	六・三〇・一〇五・三四三・(三四四)・三
	九・三九・四二・四三八・四七五・四七九
三川(三品親王家) 二四	
満氏(源) 一四〇	
光行(源) 六三・七五・九・二三・二六・(二六)	
	・一八六・四七・三三・三五五・(三五)
	四六・四六六
命徳丸 二六	
宗尊親王(三品親王) 二六・二・二四・三・三・	
	三九・四八・(四九)・五四・六四・九七・一〇
	七・二四・一四三・二七・三〇・二六六・
	二九・三・二七・三四・三六・三五・(三
	八)・四三・四二・四六・四九・四五
	五・(四五)
宗仲(高階) 二九	

持章(清原) 一五〇	
基氏(藤) 二九四	
基氏(源) 一六	
基滋(藤原) 三・四五・八六	
基輔(藤原) 七・二八・三九四	
基隆(藤原) 七・一〇六・六〇・三〇・(一〇)・三	
	五三・四三・四四二
基綱(藤原) (四)・三三・三五・三七・三四六・二九	
	六・三五七・三六・一五
基治(藤原) 六・一〇・四	
基広(藤原) 一七・一六七	
基政(藤原) 二・八三・五四・三九・三六七・四三	
守季(アルイハ芳季カ) 七七	
盛能(藤) 二七九	
や 行	
康茂(三善) 二五・三九・一三	
安経(藤) 四〇五	
泰時(平) 三・七九・一〇・四六・一七・三〇・三	
	八・四二〇
行兼(紀) 三五〇	
行茂(藤) 二七四・三〇・四一	
行郊(神) 三九・三・五一	
芳家 一〇・五一・三三・四三・(四三)	
能清(藤原カ) 八・二六・九五・三〇・三二・三七	

四三九

芳霧

三二

芳季(守季ヲモ見ヨ) 一九四・九六・三三・三四三

頼業(藤原)

七一

ら行

隆榮(法師カ) 三六・四一九

隆弁(僧正カ) 二〇九・三三七・三七五・四八〇

良曉(法師カ)

四七〇

良心(法師)

三・四・一〇五

良念(法師)

四六九

蓮生(法師)

五・一二・三四七・三七・四〇二・四二三

わ行

和空(法師カ) 二三・四四三

頭字不明・作者不明

□右衛門督

三七

□円(西円カ)

四三

□雅

四〇〇

□兼

四六

□時

四七

□直

三三

□命(法師)

三〇

□行(親行カ) 四七一

無名(藤原) (四)・一九七

作者不明

三六・四三三・四三三・四六六・四  
七二・四七三・四八二・四八三・四八八・四九

一

作者に問題ある歌(四の他は、正確には  
作者不明とすべきかも知れない歌)

四・四九・一〇三・一一九・一四五・一四九・一  
六三・一二・一八四・二〇〇・二〇一・三二七  
・三三九・三四〇・三四四・三五六・三六九・三  
八〇・三六六・四三三・四五六・四五八